

『正法眼蔵』(しょうぼうげんぞう)は、福井県にある大本山永平寺を開かれた道元^{どうげん}禅師が、ご自身の教えをまとめ、書き著したものです。道元禅師は約二十年にわたり、お釈迦さまから伝わった正しい教えを書き残されました。それを集めて七十五巻や九十五巻などにまとめたものが『正法眼蔵』^{しょうぼうげんぞう}です。

それは、宗教書としてだけでなく、哲学書としても国内外で読まれておりますが、哲学書と聞くと、難しく分かりづらいものだと思われるでしょう。たしかに、難解部分も多くありますが、本来、『正法眼蔵』は道元禅師が修行僧を導き正しく修行ができるようにと示されたものです。

この『正法眼蔵』を全て読み、学び、実践することはなかなか大変なことです。諸説ありますが、古来より「弁道話」(べんどうわ)・「現成公案」(げんじょうこうあん)・「仏性」(ぶっしょう)の三つが主要な巻であるといわれています。基本的に、お釈迦さまの正しい教えと、さとりについて説かれています。

さて、『正法眼蔵』という言葉の意味はといいますと、「正法」とは、お釈迦さまの正しい教え、さとりの真実のこと。「眼蔵」^{げんぞう}とは、お釈迦さまがさとった「正法」の内容を得ることができれば、一切を明らかにして迷いなく見通せる「眼」^{まなこ}のごとくになり、一切をおさめて余すところがないから「蔵」になる、ということから「眼」と「蔵」とを合せて「眼蔵」^{げんぞう}となります。

道元禅師は、鎌倉時代の日本での僧侶としてのそれまでの修行が、自分が中国に渡り修行で体験したものとかげ離れていたことを痛感し、仏道に生きる人、主に修行僧のために教えを残されたのです。

それは、さとりと修行について、坐禅について、お袈裟^{けさ}の大切さなどお釈迦さまの教えの根本から、顔の洗い方やお手洗いの使い方・お風呂の入り方などの細かい作法まで、多岐にわたり丁寧に書き残されました。

正しい生活の実践そのものが修行であり、お釈迦さまのさとりであると説く曹洞宗の特色がよく現れているのです。

『正法眼蔵』^{しょうぼうげんぞう}があるからこそ現在の曹洞宗があるといっても良いでしょう。現代語訳もたくさん出ておりますので、是非、手にとって道元^{どうげん}禅師の教えに触れていただきたいものです。